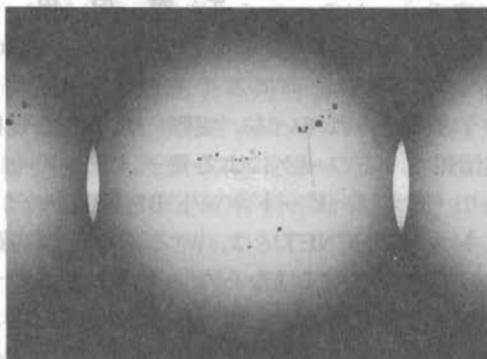


サークル紹介

まいどっ！落語研究会でおます

総合科学部学生 花木直子



落語研究会は、昭和45年、6名の部員が集まって始まった。昭和48年には、桂米紫師匠（上方落語協会事務局長）を特別顧問に迎え、以後、代を重ねて、来年には創部20周年を迎える。落研ボックスの壁には、代々の部員の芸名を寄席文字で書いた系譜が貼ってある（新入部員の多かった年、少なかった年、一目瞭然）。そして、たとえお会いしたことはなくても、「秘話」が伝えられていたりする。ボウリング全盛期にマイ・ボウルを持っていた先輩とか、落語家さんのお宅に乗りこんでいた先輩とか。「同じやるならことどんまで」という姿勢がうかがわれる。（そのためか、落研では、留年が、さほど珍しい事ではない。）落語家さんの来ない地・広島で、プロの落語家さんを迎えて寄席を興行したり、とにかく行動的と言えよう。

現在、落研の部員は13名。初代顧問の佐々木和夫先生（工学部教授）から引き継がれて、二代目顧問は片岡徳雄先生（現教育学部長）である。20年のうちに、落語研究会の体質も変化ただろう。しかし、相変わらず、寄席を興行している。落語は、聞いておもしろいし、演ったらなおさら、おもしろい。そう思う人が落研にいる限り、落研は続くはずである。

総科のてっぺんに天体ドーム

——天文学研究会——

理学部学生 待田健太郎



第19回寄席でがんす（平成元年5月21興行）

天文学という言葉から何を連想されるでしょうか？月、星、流星、天の川、銀河系……というふうに天文学には人類が夜空を見上げるようになってから、ずっと持ち続けている星々への限りない思いがあるのです。天文と言っても数式をならべて、はるか遠方の星のことを研究している人もいれば、星を見上げて「ああ、きれいだ！」とため息を漏らすような人もいるのです。どちらかと言えば後者にあたる私達ですが、総合科学部の御好意により25cm反射望遠鏡をはじめとする数台の望遠鏡を使わせてもらっています。25cmという口径はかなり大きなクラスに入るものの、この望遠鏡で見る惑星、星雲・星団は圧巻です。（さすがにポイジャーホードには見えませんが）又、これも総合科学部の御好意で暗室を使用させていただけており、この暗室で記念写真程度のものから、定量的な結果を出す観測用の写真まで処理しています。時には天文雑誌の写真欄に入選した作品もここでプリントされました。一応、月にはじまり惑星、彗星、流星、星野、星雲・星団にいたるまで星と名のつくものはひとつおり撮影しています。

夏休みなどの長期休暇のときには、広島よりもっと条件のよい満天の星空の見える郊外へ合宿に行くこともあります。授業のある普通の日には前記の25cm反射望遠鏡のあるドームにだれかいますので、もし、星に興味がありましたら、そちらのほうまでいらして下さい。